

「出エジプト記」の表題は1~15章からの「脱出」と、ヘブル語聖書の方法通り冒頭イスラエルの子らの「名前」に当たる言葉が表題である。また出エ全体の内容は、1部「脱出」(1-15章)・2部「荒野」(16-18章)・3部「シナイ契約」(19-40章)で成っている。

前回創世記4部構成の内ヤコブ物語は創世記から出エジプト記への橋渡しの機能を持つと言った。

冒頭にエジプトで宰相になったヨセフと、カナンではなくエジプトで最晩年を迎えたヨセフの父ヤコブ一族がエジプトで一大勢力となりエジプトを席卷していた。だが、時代の変遷は常に速く、ヨセフを知らない新しいエジプト王(ファラオ)が出て国を支配し、国民には他国民イスラエルはこの国であまりにも数多く、強力だったので戦争が起きればエジプトはイスラエルのものになりかねぬと警告し、そうならぬ間に彼らの上に強制労働の監督を置き、重労働を課して虐待し、弱体化させ、消滅をはかった。

政治・経済・物質・諸文化の何ものも持たなかった寄留の民イスラエルは、かくして差別され、責められ、重労働とイスラエル人の男子皆殺しの凄惨の中に貶められた。

この時、「水の中から引き上げられた」(2:10)モーセは、ミディアンの祭司エテロの羊の群れを飼う者になっていたが、神の山ホレブで燃えつきぬ柴の間から、履物を脱いで、空身で主の前に立て(礼拝)と主に呼びかけられた。

そこは聖なる地で、この礼拝を通して、主はモーセに「わたしは必ずあなたと共にいる」(3:2)と約束し、イスラエルをエジプトから導き出して救い、主の民として贖って、必ず「乳と蜜の流れる地」へ導き上るとの決断が宣告された。

イスラエルは寄留者、荒れ野を彷徨う者だったがその確信は此处で生まれた。

ファラオの圧政とまことの神に従うことを拒絶する人間の不遜、政治権力を我が物にして限度を超える自尊心に対峙したモーセは、主の10の災禍(7:8-11:10)をもってしても王の固い心を解くことは出来なかった。神の「過越し」(12:24)の導きは其処に起こった。イスラエルが主のもとにあり、一体とされ、主の言葉を信じて服従した証しの一大事件だ。

「過越し」は、イスラエルの脱出に直結した。この時、神は敢えて、「民を葦の海に通じる荒れ野の道に迂回させられ、民は隊伍を整えてエジプトの国から上った」(13:18)。主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって彼らを照らされた(13:21)。

出エは昔から多くの人が自己の抱える困難と突き合わせて、「出エジプトする」と言い合った歴史がある。

世に在る生きとし生ける者全てが己を困む不自由と苦難から解かれず、世の思い患いによって真に自由にされない現実を持つ。しかし、それは「わたしはあなたと共にいる」を信じる時全面的に解決した。

パウロは、「自由を得させるためにキリストはわたしたちを自由の身にして下さった」(ガラ 5:1)と言っている。